





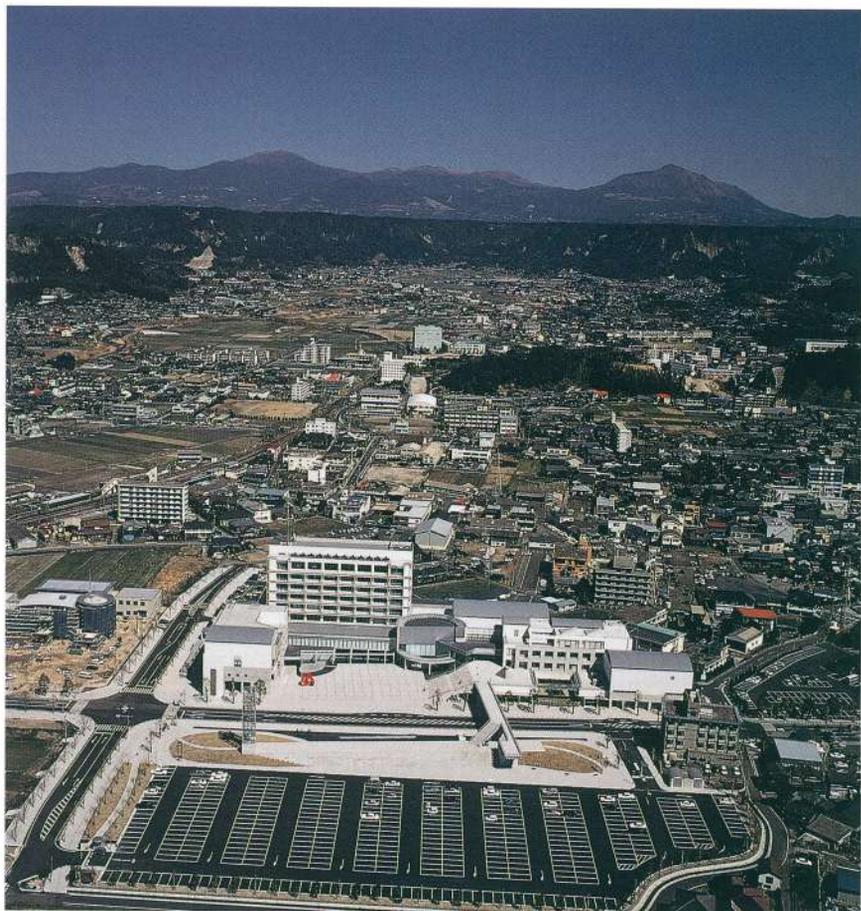
朱 門 (昭和51年2月1日 市指定文化財)



國分郷土誌

下卷

うるおいとゆとりのあるまち



国分シビックセンター（市議会棟・市役所棟・複合施設棟）



旧市庁舎

まち並みの発展



新市街通り商店街



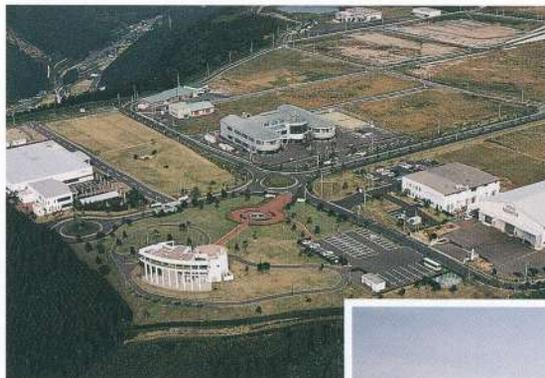
旭通り商店街



昭和30年ごろの旭通り

活力とにぎわいのあるまち

テクノポリス建設



◀ 上野原テクノパーク



▶ 第一工業大学 ▶



◀ 名波ハイタウン



▶ 城山公園 ▶



国分の行事



初市(2月)▶



◀ 夏祭り(7月)



産業フェア・農業祭 ▶
(11月)

古代のロマンに彩られた豊かな心をはぐくむまち



上野原遺跡（国内最古級・最大規模の集落跡）

生涯学習の推進
（公民館講座）



◀ 国分上野原テクノ
マラソン大会

太鼓踊り
(重久地区保存会)



田の神舞
あめのみかなねし
(天御中主神社)



はんぎり出し (広瀬海岸潮だまり)

やさしさと思いやりのあるまち



道義高揚宣言のまち



ふれあいボランティアの日

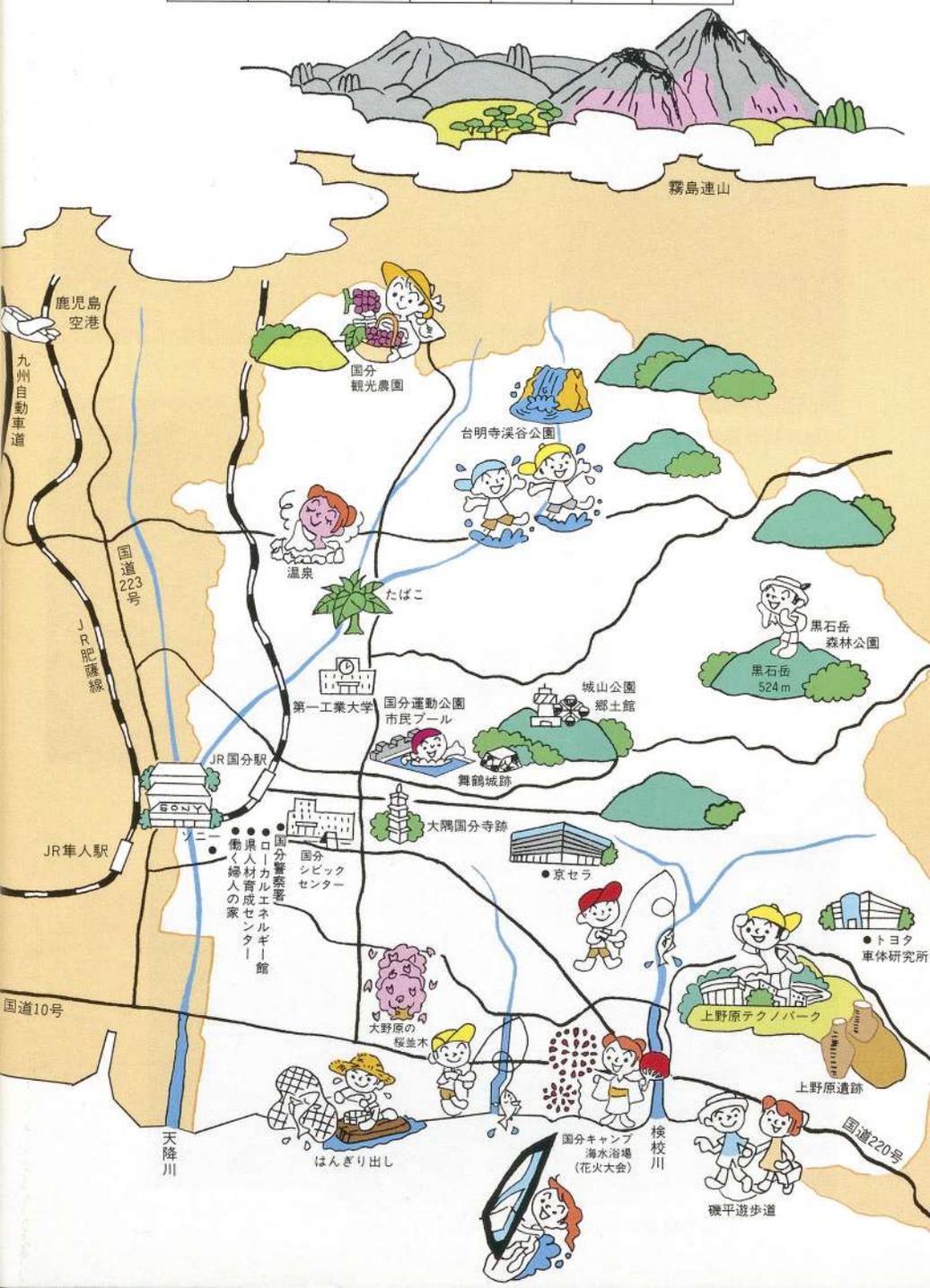


姉妹都市海津町との交流



市民の健康のために（健康増進大会）

イラストマップ



霧島連山

鹿兒島
空港

九州自動車道

国道223号

JR肥薩線

JR国分駅

JR牟婁駅

国道10号

天隆川

はんざり出し

国分キャンプ
海水浴場
(花火大会)

検校川

磯平遊歩道

国道220号

上野原遺跡

上野原テクノパーク

トヨタ
車体研究所

京セラ

大隅国分寺跡

舞鶴城跡

国分運動公園
市民プール

第一工業大学

城山公園
郷土館

黒石丘
524m
森林公園

温泉

たばこ

台明寺溪谷公園

国分
観光農園

発刊のことば



国分市長 谷 口 義 一

わたしたちのまち「国分市」は、上野原遺跡にみる縄文早期前葉の約九千五百年前の国内最古で最大級の集落跡の発見など、遺跡・史跡の多い地域であります。

国分の埋れゆく郷土資料の発掘をし、歴史を解明して後世に継承する責務を深く感じ、市制四十年記念事業の一つとして、新たな『国分郷土誌』の編さんを企画いたしました。

郷土誌編さん事務は、平成五年二月から事務局を設置し検討に入りましたが、新国分郷土誌は前国分郷土誌を全面改訂し、前回発刊の昭和四十八年以降の記録を追加するなど、内容の充実に努めてまいりました。平成九年三月には、『国分郷土誌』上巻と資料編を刊行し、引き続き下巻の編さんを急いでまいりましたが、ここに現代編と民俗編、そして別編として上野原遺跡の縄文早期の集落跡に関する特別記事を内容とした、『国分郷土誌』下巻が発刊の運びとなり、心から喜びに堪えません。

下巻の「現代編」には、太平洋戦争の終結から現在までを取り上げましたが、戦後の混乱、町村合併等で資料が散逸しているため、調査収集には多大のご苦勞があつたと聞いています。

顧みますと、郷土誌編さん事業が発足して以来六年目を迎えました。この間編さん専門委員・編さん協力員の三名が急逝されるなど、委員の各位には計り知れないご苦勞があつたことと推察する次第ですが、みごとに新国分郷土誌編さん事業が達成されましたことに深く敬意を表します。

これもひとえに総監修の五味先生のご指導と、甲斐専門委員長並びに専門委員各位のご苦勞のたまものと感謝の意を表するものです。

また、編さんに当たり、専門的な立場でご執筆くださった各先生方、そして資料の提供や調査にご協力くださった方々に厚くお礼を申し上げます。

新たな『国分郷土誌』の完成により、ますます発展を続ける本市の姿を市民はじめ多くの皆様に伝達し、将来への大きな指針を示すための資料として活用されることを願ひ、発刊のことばといたします。

平成十年六月

発刊にあたって



国分市教育長
樋園正仁
国分郷土誌編さん委員長

国分市は、市制四十周年記念事業として、平成五年から郷土誌編さんを手がけてまいりましたが、このほど『上巻』『下巻』『資料編』の三冊からなる新しい『国分郷土誌』を発刊する運びとなりました。

郷土誌は縄文の太古から現代に至るまでの郷土の地誌歴史の集大成であろうと思います。ふるさとに生を受けた者がふるさとに思いをはせ、ふるさとを愛する気持ちは、ごく自然な感情であります。それを一層確かなものにするために、ふるさとのことを系統だてて理解することは大切なことであると思います。この意味で、国分の地をふるさととする人々に、また本市に新しくこられた人々や他郷の人々に、過去から現在までの国分の姿を知っていただきたい、そして未来へ大きく発展していこうとする、あすの国分を築く糧にさせていただきたい、そんな願いを込めて本郷土誌の編さんに当たりました。

したがしまして『上巻』には「国分の自然・人口」と「原始・古代から近代までの国分」を、『下巻』には「終戦から現代までの国分」と「国分の民俗」を、そして『資料編』には「国分に残る歴史的資料」を登載して、読者の便に供するように配慮いたしました。なお、全国から注目されております縄文時代早期前葉の集落跡の「上野原遺跡」につきましては、特に下巻に「別編」として取り上げました。

本郷土誌は多くの方々のご尽力によって発刊されました。総監修の五味克夫先生をはじめ、民俗編監修の川野和昭先生、ご専門の立場からの玉稿をお寄せくださった諸先生、直接各分野の執筆を担当された編さん専門委員の先生、地域の資料発掘に努めていただいた編さん協力員の方々に対し、厚くお礼を申しあげます。

限られた紙面内で、可能な限り国分の姿を採り上げたつもりですが、まだまだ埋もれていたり、未発見、未調査の資料や文献等も多々あるかと思えます。また研究不足による不十分な記述や誤記もあろうかと思えます。これらの点につきましては、今後ご教示、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

終わりに本郷土誌の編さん、発行にあたり、ご協力くださいました市内外の方々には厚くお礼を申し上げます。本郷土誌が広く多くの方々に親しまれ活用されますことを念願して、発刊のごあいさつといたします。

監修のことば



鹿児島大学名誉教授 五味 克夫

昨年三月に相ついで刊行された『国分郷土誌』上巻・資料編に引き続き、主として現代編・民俗編を取り扱う下巻の執筆編集作業が進められ、初秋のころから今年のはじめにかけて順不同で章節単位に届けられる原稿を逐次、そしてほぼすべてについて閲覧し終えた。

太平洋戦争後の荒廃期、混乱期から国分市の誕生、そして現在に至るまでの半世紀余にわたる現代の歴史のあゆみを、行政、財政、選挙、議会、福祉、衛生、環境整備、警察、消防、交通、通信、都市整備、産業、教育、宗教、文化、旧城跡、観光、民俗等の各分野にわたって各委員、執筆者各位が工夫をこらし、資料に則して努力成稿されたものを、さらに委員会で協議補正を加えられた成果としてまとめられていた。資料の収集にも苦心された由で、今さらながら近現代史料の逸失の早さとそれらの保存の困難さがうかがわれた。

編さん事業の進行中に事務局のあった図書館も新築のシビックセンター内に移転したし、また上

野原テクノパーク建設予定地からは九千五百年以前の縄文早期前葉の遺跡、遺物が大量に発見されて全国的な話題をよび、鹿児島市や国分市で幾度かシンポジウムが開かれたりもした。現在もその遺跡整備計画が審議継続中である。本巻でもその実状にかんがみ、特に県埋蔵文化財センターの間調査概報をもとに、新東晃一氏にその大要を加筆していただいた。

上野原台地では縄文時代以降の弥生・古墳・古代・中世・近世の遺構、遺物等も発見されているわけで、それにより国分市域での一万年来の歴史の堆積をうかがい知ることができるのである。遠く隼人の時代から古代・中世・近世・近代と王朝・武家・庶民の時代の歴史がつづく国分市域は、南九州大隅国の中心地で、国府があり、国分寺があり、台明寺や止上神社があり、守護所があり、島津氏の居城があり、当然のことながら史跡が豊富である。しかしその視野は隣接の町村にも広げ一体として把握する必要がある。鹿児島神宮―大隅正八幡宮や隼人塚、富隈城、浜之市等も共通の地域のものとして併せて注目考察すべきことはいうまでもない。

それらに関する既刊の上巻・資料編の記述からも既に幾つもの新知見が発見されている。私自身資料編収載の『国分諸古記』や『服部日記』の新城屋敷割図によって現在の城山公園の展望台付近にも御飯屋があり、そこから東へ武士の屋敷が大手口（現在の公園登口）まで連なっていたことや、中でも三百六十石余の北原氏屋敷が広域で、同氏が伊集院幸侃事件に加担せず、藩主に忠誠を尽くしたとして、特に島津義久の意向で旧領伊集院神殿（それ以前は真幸院領主）から新城に加増移住を命じられた（慶長九年か）経緯を知ることができたのである。

そしてまたこれとは別に上巻口絵の「国府衆中屋敷配置図」に御屋形から反対の真南、高麗町、

古川に近接して「又四郎様御飯屋」があり、清水、垂水島津家の国分市域とのかかわりの歴史を読みとることができたのである（これらに関しては近時刊行された県埋蔵文化財センターの舞鶴城の発掘調査報告書中に「文献史料からみた舞鶴城」として栗林文夫氏の詳しい記述がある）。

大方の読者各位も記述の端々から新たな発見をされ、地域の歴史の深さ、諸事象の関連の妙に気付かれ、日常の生活の精神的糧かてとも心の潤いうるほいともしていただければと期待している。

本巻でも既に上巻でとりあげた分を増補する形で、宗教、文化の章で、特に明治初年の廃仏毀釈によつて損壞された神社仏閣等については、平田信芳氏の足で歩き確かめられた克明なレポートを掲載することができた。また本巻では民俗編に重点をおき、多岐にわたり実例の紹介説明に努めている。特に川野和昭氏・出村卓三氏・松田誠氏に校閲、執筆をいただき一段と充実した内容になっていると思う。

はからずも八年前鹿児島大学退官と共に国分平野を眺望する台地上の鹿児島女子大学に勤務、その在職中の後半、平成六―九年度にかけて国分市の市誌編さんの仕事に関与することとなり、非力ながら関係者各位のご尽力、ご協力によつてまがりなりにも『国分郷土誌』全三巻の監修の任を果たし得たことに感謝し、その縁の深さに感慨を覚える次第である。

終わりに国分市が四十周年を経過してますます新旧の調和のとれた豊かな地域都市として発展することを祈念し、新『国分郷土誌』の活用と、将来にわたるその補正充実に期待を寄せたい。

凡 例

- 一、本誌は「国分郷土誌」（上巻・下巻・資料編の全三巻）のうちの下巻である。
- 一、本誌の内容は、第六編「現代の国分」、第七編「国分の民俗」、別編「上野原遺跡」の三編構成とし、巻末に年表を付した。
- 一、第六編「現代の国分」は原則として太平洋戦争終結後から平成九年三月までとしたが、可能な限り新しい記録を収集して記述した。
- 一、史実の記録は客観的であることを重視し、出典、根拠を明らかにすることに努めた。
- 一、本文は平易な口語体を用いることを原則とし、高校生が理解できるように努めた。
- 一、記述は常用漢字と現代仮名遣いを原則とし、誤読のおそれのある漢字・専門用語・旧漢字などには、つとめてルビ（振り仮名）を付した。
- 一、わかりにくい方言は（ ）に意味を付した。
- 一、専門用語については、必要に応じて補説を入れた。
- 一、引用文・補説・囲み記事は文字を小さくし、一字下げとした。
- 一、人名については、原則として敬称を省略した。
- 一、年号は原則として和暦を用い、適宜西暦を（ ）内に入れた。
- 一、計量単位は原則としてメートル法で表した。
- 一、不適切な表現を用いないように、細心の注意を払った。しかし、歴史的用語などのためやむを得ず差別用語を用いた部分があるが、これは差別解消の視点に立つて、封建社会や歴史的身分制度を認識する意味でそのまま収載したものである。

- 一、古文書等の引用文献については、原則として原文のままとし、不明の箇所等は（ママ）・カ・□□とした。
- 二、昭和四十八年刊行の国分郷土誌を『前国分郷土誌』とし、昭和三十五年刊行の国分郷土誌を『旧国分郷土誌』として表記した。

国分郷土誌下巻／目次

発刊のことは

国分市長谷口義一

発刊にあたって

国分市教育長樋園正仁
国分郷土誌編さん委員長

監修のことは

鹿児島大学名誉教授五味克夫

凡例

第六編 現代の国分

第一章 戦後の混乱と諸改革

第一節 戦後の混乱

太平洋戦争終わる

連合国軍の進駐

インフレとその対策

戦後の食糧難

国分町発行配給公文書

住宅難

海外引揚げ

満州・ソ連からの引揚者

第二節 戦後の諸改革

日本の民主化を進める

新憲法の制定

第二章 国分市の誕生

第一節 町村合併前の各町村のようす

合併前の五か町村

第二節	町村合併と国分市の誕生	二六
一	町村合併促進法の制定	二六
	地方自治法制定と合併の機運	促進法施行前の本県の実態
二	国分市の誕生	二八
	国分町第一次合併	国分町第二次合併
	市制施行	隼人町へ一部編入合併
	国分市・隼人町の境界変更	隼人町との合併問題
第三節	年齢階層別人口の推移	三二
第三章	行政	三四
第一節	市章と市民憲章等	三四
	市章と市民憲章	市歌と国分小唄
	市の木と市の花	道義高揚宣言都市
	姉妹都市との盟約	名誉市民
第二節	市政の主なできごとと歴代市三役	三八
	市政の主なできごと	歴代市三役
第三節	行政機構の変遷	四二
	戦後の地方行政	町村合併・市制施行と行政機構
	社会情勢と機構の変遷	
	市制四十周年目の大改革	国分市しみん学習支援公社
第四節	条例に基づく行政付属機関	五三
第五節	地籍調査	五六
	地籍調査のあらまし	国分の地籍調査
第六節	住居表示事業	五八

第七節	自衛隊の誘致	五九
	誘致までの経過	
	国分自衛隊の沿革	市民とのふれあい
第八節	テクノポリス指定	六二
	国・県のテクノポリス基本構想	国分単人テクノポリス
	主要事業	
	テレポートピア構想	将来の展望
第九節	庁舎新築移転と市制四十周年記念事業	七三
	庁舎新築移転までの経過	国分シビックセンター
	市制四十周年記念事業	
第十節	国分市公共施設	七六
第十一節	国・県等の機関	七六
	国分公共職業安定所	鹿児島地方務局国分出張所
		鹿児島県立農業大学校畜産学部
	鹿児島県国分農業改良普及所	鹿児島県牧之原畜犬管理センター
		鹿児島県畜産試験場
	鹿児島頭脳センター	鹿児島県人材育成センター
第四章 財 政		
第一節	市財政の変遷	八七
一	市制施行時の財政	八七
	赤字財政下の出発	
二	赤字財政の再建	八七
	財政再建の時代	財政基盤確立の時代
三	赤字脱却後の財政	九〇
	健全財政への努力時代	財政向上と市勢発展の時代

第二節	市財政の現状と特色	九四	
一	財政指数標等の状況	九四	
二	市税の状況	九四	
三	基金の状況	九六	
四	市債現在高の状況	九七	
第五章	選挙と議会	一〇〇	
第一節	終戦後（現在の選挙制度の変遷）	一〇〇	
公職選挙法の制定			
第二節	市議会の発足	一〇二	
合併時の町村議会	新国分町の議会議員	発足時の市議会議員	
第三節	市議会議員・歴代議長・副議長	一〇三	
市議会議員	選挙人名簿登録者数の推移	市議会の活動等	
第四節	国会議員・県議会議員の選挙	一〇八	
衆議院議員の選挙	参議院議員の選挙	県議会議員の選挙	
第六章	福祉の増進と保健衛生	一一三	
第一節	やさしさと思いやりの福祉	一一三	
戦後の社会福祉制度	高齢者のために	児童のために	母（父）子のために
障害者のために	低所得者のために	勤労者のために	女性の社会参加
第二節	社会福祉組織	一一三	
民生委員	社会福祉協議会		

第三節	国民健康保険	一三三
	国民健康保険制度		
第四節	国民年金	一三六
	国民年金制度の実施		
第五節	保健・衛生	一三七
	戦中戦後の開業医	医療機関状況	市民の健康実態・状況
	県平均との比較		児童の体格の推移
第七節	環境の整備	一四六
第一節	人口増加と住宅問題	一四六
	人口増加の現象と背景	五万人突破と将来人口	人口増加に伴う市営住宅建設
	住宅のうつりかわり	一般住宅の建設ブーム	
第二節	ごみ処理とし尿処理	一五五
	ごみ収集の開始	ごみ焼却場の建設	粗大ごみ処理施設
	容器包装リサイクル法	産業廃棄物	ごみ処理の課題
		し尿処理	公共下水道
第三節	公営斎場と墓地	一六一
	旧火葬場	国分共同斎場	市営墓地
			共同墓地
第八章	警察・消防	一六四
第一節	警察	一六四
	明治初期の警察	国分警察署の歩み	戦後の警察制度
	国分警察署の現況	交通事故件数	戦後の国分警察署

第二節 消 防 一六九

一 消防のあゆみ 一六九

村の消防 明治・大正の消防 私設消防組から公設消防組へ 警防団の設置

二 消防団・国分地区消防組合 一七五

警防団から消防団へ 国分市消防団 国分地区消防組合

第九章 交通・通信・エネルギー 一八〇

第一節 交 通 一八〇

国鉄国分駅 国鉄からJR国分駅へ 大隅線の開通と廃線 自家用自動車の普及

バスの運行 JRバス 林田バス 鹿児島交通

第二節 通 信 一八八

一 郵 便 一八八

通信手段の歴史 郵便制度の変遷 市内の郵便局 市内の簡易郵便局

二 電 話 一九八

電信の発達と普及 電話の普及 昭和十年の電話加入状況

農村公衆電話 新しい通信手段

第三節 エネルギー 二〇四

一 電 力 二〇四

明かりの進歩 電灯の普及 入戸発電所 電力会社の変遷

二 ガ ス 二〇六

LPガス 都市ガス 天然ガス

第十章 まちづくり事業 二〇九

第一節 都市計画 二〇九

国・県の都市計画 街路事業 橋梁整備事業 公園整備事業

用途地域制度 土地区画整理事業

第二節 道路の整備 二二七

戦後の町村道 国道と県道 国分隼人道路 整備の進む市道

農道 林道 失業対策事業

第三節 住宅建設 二三八

市営住宅

第四節 水道事業 二三八

一 上水道事業 二三八

水道創設 第一次拡張事業 第二次拡張事業 第三次拡張事業

簡易水道 飲雑用水施設

二 下水道事業 二三六

下水道 国分隼人クリーンセンター

第十一章 産業 二三九

第一節 農業 二三九

一 戦後の農政 二三九

戦中・戦後の食糧事情 農地改革 国分地方の農地改革状況 供出制度

食糧増産への道 農家戸数と農家人口の推移

二 農業の近代化 二四八

農業基本法 農業構造改善事業 県宮ほ場整備事業 農業の機械化 肥料

農業・除草剤 品種改良 農作物の推移 国分とまと・あいら新ごぼう

府中と育苗 農業人口の推移 農村の現状と課題 国分市農業の課題

始良東部公設地方卸売市場 農業委員会 農業協同組合 農業共済組合

第二節 畜産業 二六九

戦後畜産業の歩み 家畜頭羽数の変貌 畜産施設とせり市 始良郡中央家畜市場

県畜産試験場 畜産の現況 畜産し尿処理

第三節 林業 二七七

林業と自然環境 戦中・戦後の木材事情 造林と伐採

林業の現況 森林組合 林業の将来と課題

第四節 商業 二八三

戦後の商店街 商店数の推移 通り会のうつりかわり 商店街のひろがり

大型店・スーパーの進出 コンビニの急成長 商工会から商工会議所へ 青年会議所

第五節 金融業 二九五

戦前・戦後の金融機関 経済復興のあしあと 大企業・大型店の進出

金融機関の現況 市内の金融機関

第六節 鉱・工業 三〇一

一 鉱業 三〇一

国分鉱山

二 工 業	三〇三
戦後の工業	工業の概況	業種別工業
三 国分の企業	三〇八
現在の企業	今後の課題	
第七節 水産業	三二三
一 藩政時代の国分沿岸漁業	三二三
「浦」の漁民	小村浦町	小村の漁業
二 瀬戸海峡埋没後	三一五
『桜島大正噴火誌』の記録		
三 沿岸漁業の現況	三一九
国分漁港の完成	錦江漁業組合	国分漁業の現況
養殖漁業	内水面漁業	錦江湾奥の水質問題
第八節 製塩業	三四六
塩づくりの歴史	現在の製塩法	東敷塩田の始まり
東敷塩田の廃止	入浜式塩田の製塩の実際	東敷塩田の推移
第十二章 たばこ	三四二
第一節 たばこ日本へ	三四二
たばこ発祥の地	たばこ日本へ	幕府の対応
		薩摩藩の対応
第二節 国分たばこの起こり	三四六
国分たばこと服部宗重	伊地知大膳の逸話	

第三節	全国に名を売った国分たばこ	三五〇
国分葉の特長	御料たばこ	
第四節	国分たばこの販売	三五五
よく売れた国分たばこ	たばこの相場	
たばこと国分商人	専売公社国分出張所のあゆみ	
第五節	国分たばこの耕作	三六二
近代の耕作状況	たばこ耕作上の注意	
在来種から黄色種へ	現在のたばこ耕作	
育苗から出荷まで	耕作面積・価格等	
商品数		
第六節	たばこ耕作組合等	三七四
たばこ耕作組合	国分たばこ販売協同組合	
第十三章	教 育	三七七
第一節	新しい教育制度	三七七
占領下の教育	新しい教育制度	
第二節	教育行政	三七九
教育委員会の発足	教育行政の機構	
平成九年度教育行政の方針	歴代教育委員長	
歴代教育長		
第三節	学校教育	三八三
一	学校教育の変遷	三八三
新学制による小学校の発足	新制中学校	
小学校児童数の推移	中学校生徒数の推移	
新制高等学校	小中学校の統廃合	
二	幼稚園制度の改革と現状	三八六

三	市内小学校の沿革	三七八
四	市内中学校の沿革	四〇四
五	市内高等学校・大学等の沿革	四〇八
第四節	社会教育	四二二
一	社会教育の変遷	四二二
	戦前の社会教育	四二二
	戦後の社会教育	四二二
二	社会教育活動	四二四
	青年教育	四二四
	婦人教育	四二四
	成人教育	四二四
	高齢者教育	四二四
	家庭教育学級	四二四
	図書館の読書運動	四二四
三	社会教育団体	四一九
	P T A	四一九
	青年団	四一九
	婦人会	四一九
	4 H クラブ	四一九
四	社会教育施設	四二四
	図書館のあゆみ	四二四
	視聴覚センター	四二四
	郷土館	四二四
	地区集会所	四二四
五	交流教育の推進	四二八
	国際交流	四二八
	姉妹都市盟約	四二八
	教育産業	四二八
第五節	社会体育	四三〇
一	社会体育の現状と課題	四三〇
	社会体育の現状と事業	四三〇
	体育施設の活用状況	四三〇
	学校体育施設開放	四三〇
	スポーツ教室	四三〇

二 スポーツ団体の活動 四三三

市体育協会 スポーツ少年団

第十四章 宗 教 四三五

第一節 古代からの宗教の流れ 四三五

奈良・平安時代の信仰 鎌倉仏教と勧請神 近世の社寺と石祠・石造物

第二節 主要な神社 四三八

韓国宇豆峯神社 大穴持神社 伊勢神社 若宮神社 愛宕神社 竜王宮跡

久満崎神社 乙宮神社 高塚山神廟 諏訪神社 稲富神社 飯富神社

宮毘神社 若尊神社 剣神社 長野神社 鎮守神社 枝宮神社 小鳥神社

八坂神社 祓戸神社 稲荷神社 北山神社 天御中主神社 高座神社

止上神社 (隼人塚) (茂杜) 日吉山王社

第三節 民俗 神 四六二

田之神・山神・水神 内神・地神 秋葉神社 保食神 豊受姫神 早馬神

塞の神・石敢当

第四節 近世以前の寺院 四六六

神社と寺院の違い 寺院一覧表 大隅国分寺 国分寺造立の歴史的背景

竹林山衆集院台明寺 吉水山光明院念仏寺 仏頂山楞嚴寺 安骨山徳持庵

虎岳山瀨竜院 五峯山竜護院金剛寺 文明山竜昌寺 鷲峯山勧持院遠寿寺

成等山無量寿院正覚寺 門倉薬師

第五節 廃仏毀釈 四七七

廃仏への流れ 神仏分離令 廃仏毀釈

第六節 現在の寺院・教会 四八二

正福寺 法円寺 法隆寺 惠楽寺 天理教国府分教会 日本基督教団国分教会

南九州イエス之御霊教会

第十五章 文化 四八五

第一節 教育・文化活動と郷土の文化人等 四八五

一 市単位の教育・文化活動 四八五

文化事業 公民館定期講座 社会教育講座 国分市働く婦人の家

老人クラブ連合会開設教室 市立図書館開設講座 視聴覚センター研修講座

その他の市民講座

二 地域の教育・文化活動 四九三

地区の文化祭 民俗芸能保存会 地区公民館講座 各種同好会

三 文化団体の活動 四九五

国分市文化協会 俳句結社「朱樂」 りんごの木文庫 国分手づくり文化の会

国分市民吹奏楽団 国分市少年少女合唱団

四 国分に足跡を残した文化人 四九九

服部英龍 池之上原心 窪田二郎 浜田 到 指宿貞虎

与謝野寛（鉄幹）・晶子 石塚月亭 山口誓子

第二節 国分市の文化財 五〇四

一 国指定文化財「大隅国分寺跡」 五〇六

大隅国分寺跡 史跡指定の経過

二 県指定文化財「高座神社の社叢」……………五〇九

三 国分市指定文化財……………五〇

第三節 石塔・石造物……………五二八

一 石塔類……………五二八

層塔 宝塔・多宝塔 五輪塔 宝篋印塔 板碑・塔婆 六地藏石幢

二 石仏類……………五二一

阿弥陀如来 虚空藏菩薩 地藏菩薩 仁王像 保食神 庚申碑

馬頭観音碑 火神碑 地神碑 山神碑 田の神像 恵比寿像

塞神 水神碑 内神碑 磨崖仏

三 その他の石造物……………五二六

石敢当 鳥居 狛犬像 手水鉢 陰陽石 里標 石灯籠 亀趺 墓石

第四節 仮面……………五二八

一 鹿児島県の仮面……………五二八

芸能面 信仰面

二 止上神社の仮面……………五四〇

第五節 古文書類……………五五四

第十六章 旧跡・城跡……………五五七

第一節 旧跡……………五五七

乳尾の岡 青葉の笛竹 島津斉彬のお茶の水の碑 気色の杜 こがの杜

大隅国分寺跡 島津義久の墓 お平様の墓 山田越前守有信の供養塔

伊集院下野守久治の供養塔 島津忠将の供養塔 本田どんのかくし墓

渡瀬の陣跡 真心上人の石室 芭蕉句碑と国分の俳人 特攻機発進の碑

第二節 城 跡 五七七

国分の山城 山城とは 橘木城 姫木城 清水城 国分新城 隼人城

舞鶴城 上井城 長尾城 鼻連山城 その他の山城・陣跡

第十七章 観 光 六〇三

第一節 観光資源 六〇三

歴史的資源 自然環境

第二節 史跡・景勝地 六〇五

大隅国分寺跡 城山公園 台明寺溪谷公園と日枝神社 川原溪谷

黒石岳森林公園 若尊鼻遊歩道

第三節 公共レジャー施設 六〇八

一 レクリエーション的施設 六〇八

国分市民プール公園 国分北公園 国分キャンプ海水浴場 アスレチック公園

都市公園計画

二 学習的施設 六一一

国分市ローカルエネルギー館 国分市立郷土館 国分ハイテク展望台

第四節 温 泉 六一二

温泉の成分と薬理作用 市内の温泉

第五節 祭り・イベント 六一四

こくぶ桜まつり 六一四

こくぶ夏まつり 六一四

ハンギリ出し

第六節 特産品 六一六

農畜産物 六一六

加工品

工芸品

国分観光農園

第十八章 現代の年中行事 六一二

一 国分市が主催する主な行事・催しもの 六一二

二 地区公民館が主催するもの 六一四

第七編 民俗 六一九

第一章 衣食住 六三二

第一節 鹿児島島の衣食住 六三一

第二節 衣生活 六三三

一 衣の材料・紡織・染色 六三四

衣の材料 綿と機織り 麻 絹(養蚕) 染色

二 仕事着・ふだん着・晴れ着 六四二

仕事着 ふだん着 晴れ着

三 寝具・雨具・かぶり物・履物 六四四

寝具 雨具 かぶり物 履物

四 洗剤・洗濯 六四七

五	戦時中の衣生活	六四七
第三節	食生活	六四八
一	日常の食事	六四八
	主食 副食 保存食	
二	晴れの日の食事	六五五
三	菓子類	六五六
第四節	住生活	六五九
一	国分地方の住まい	六五九
	薩摩藩の住規制 籠式・在所式・町式 屋根の材料 建物の坪数	
二	農家の家屋敷	六六三
	屋敷構え 家の間取り 付属建物	
三	浦町の漁民宅	六七〇
四	建築のしきたり	六七〇
	地鎮祭 ツノタテユエ ジツツ 棟上げ ジョジユエ	
第二章	年中行事	六七七
第一節	年末行事	六七七
第二節	新春の行事	六七九
第三節	春・夏の行事	六八四
第四節	盆の行事	六九二
第五節	秋・冬の行事	六九四

第三章 人生のしきたり

..... 六九七

第一節 誕生・成長

..... 六九七

誕生まで 出産 名付け祝い お宮参り ウツセゴ 餅踏ませ

三月の節句 五月の節句 ナンカンズシ

第二節 成人祝い

..... 七〇一

成人式

第三節 結 婚

..... 七〇二

嫁さがし クツノデ オチャノン ゴゼンケの準備 ゴゼンケ

第四節 厄払いと歳祝い

..... 七〇四

厄払い 歳祝い

第五節 葬祭・墓葬

..... 七〇五

霊呼び 式の準備 ヨトツ ウツタツ 墓葬 ミツカアレ ネンキマツイ

第四章 民間信仰と講

..... 七一一

第一節 民間信仰と講のあらまし

..... 七一一

第二節 民間信仰

..... 七二二

水神 火の神 山ん神 田の神 庭の神 屋敷神 わらつと神

牧神と馬頭観音 森 路傍の神仏

第三節 講

..... 七二〇

一 信仰に関係する講

..... 七二〇

止上権現講 霧島神宮講 山ん神講 田の神講 秋葉講 伊勢講 青山講

石体講 彼岸講 虚空藏薩講 大日講 報恩講 十二夜待

二十三夜待二十六夜待 日待講 庚申講 その他の講

二 相互扶助に関係する講 七三〇

米模合講 四節講

三 一門で行う講 七三一

一門講

第五章 郷土の歌と踊り 七三四

第一節 郷土の歌 七三四

第二節 郷土の踊り 七四九

じゆきじんおどい 道化踊り 強張踊り 重久太鼓踊り 府中太鼓踊り

台明寺棒踊り 毛梨野兵六踊り

第三節 奉納舞 七五七

田之神舞 薙刀舞 劍舞 清水の田之神舞 永田地区の仮名手本忠臣藏

第六章 伝説と民話 七六〇

第一節 伝説 七六〇

第二節 民話 七七八

第七章 子どもの遊び 八〇四

第一節 男子の遊び 八〇四

第二節 女子の遊び 八一五

第三節 遊びの歌 八一八

第四節 玩 具 八二四

別編 上野原遺跡 八二九

上野原遺跡（4工区） 八三六

一 はじめに 八三六

二 上野原遺跡の発掘調査 八三六

三 4工区の発掘調査 八三八

四 第IIエリアの発掘調査 八三九

五 縄文時代早期前葉の最古・最大級の集落跡 八四二

年 表 八五一

参考文献 八六九

〈国分郷土誌〉編さん関係者 八七五

あとがき 八七七